



考古資料精選⑤
おしめがたまがたま
緒締形勾玉



北新町遺跡から出土したもので、弥生時代に使用されていた装身具です。

特に、形が「緒締」(袋、巾着、印籠、たばこ入れなどの緒を通して口を束ね締める道具)を想像させることからこのように呼ばれています。

大きさは長さ3.6センチ、幅2.3センチ、重さ21・2センチ。原石は斑点状に緑色が混じる乳白色をした翡翠で、これは新潟県糸魚川周辺で産出したものと考えられています。

このような形の勾玉は北部九州を中心に出土しており、近畿地方では極めて珍しいことから、当時

の生産や流通を考えるうえで大変貴重な資料になると思われます。また、勾玉には呪術的要素についても指摘されていることから、弥生人の精神世界がうかがえる資料とも言えるでしょう。
なお、この資料については歴史民俗資料館のホームページでも紹介しています。



考古資料精選⑥
つぼかん
壺棺



遺骸を埋葬する際に用いられた壺であることから壺棺と呼びます。中垣内遺跡から出土したもので、弥生時代中期(約2千年前)の方形周溝墓(溝を巡らした墓)に付随する形で埋葬されていました。

壺は口径22・6センチ、器高64・0センチ、胴部径49・0センチを測り、比較的大きく立派なものです。蓋は壺の底部を打ち欠き、適当な形に利用したもので、蓋だけを観察すると大切に葬るという意識が欠けていたのではないかとこの印象を受けます。

壺棺は、口の部分が狭く小さいため、成人の遺骸を納めることは到底出来()と思われることか

ら、再葬(遺骸を仮に埋葬し、骨と化してから壺や甕に入れて埋葬すること)、あるいは乳幼児や子どもの遺骸を葬るために使用されていたものと考えられています。
大東市で出土した壺棺では、乳幼児の骨が残っていたとされる市指定文化財の弥生式短頸大型壺型土器が有名ですが、加えて今回の資料も弥生時代の葬制を知るうえでは大変貴重な資料と言えます。

